

〔研究ノート〕

文教大学湘南校舎学生のスポーツ経験と意識

小林勝法、上田 大、山内 賢、松永修司、保科光作、
高木聡子、柴原健太郎、増本達哉

[Research Notes]

Students' Experiences with and Attitudes towards Sports at Shonan Campus of Bunkyo University

Katsunori KOBAYASHI Dai UEDA Ken YAMAUCHI
Shuji MATSUNAGA Kosaku HOSHINA Satoko TAKAGI
Kentarō SHIBAHARA Tatsuya MASUMOTO

Abstract

We conducted a questionnaire survey at Bunkyo University's Shonan Campus concerning students' experiences with and attitudes towards sports, and analyzed their responses as reference information for organizing the physical education curriculum, preparing lesson plans for each class, and providing students with guidance. Responses were collected from 189 students and analyzed to determine recommendations for the physical education curriculum and student guidance:

1. The percentage of students that habitually participated in athletic activities was lower at Bunkyo University than the national average reported in a national survey. This suggests there is a need to provide guidance and support to help students at Bunkyo to become more physically active.
2. There is great demand for spectators at soccer, baseball, basketball, and volleyball competitions. Accordingly, initiatives to encourage students to spectate at these events could help to increase attendance.
3. The percentage of students who expressed desire to attend sporting events involving handicapped athletes in person was lower for Bunkyo University than the national average. This suggests that there is a need to educate Bunkyo University students about disability sports and encourage them to witness such events firsthand.
4. Many students cited "poor availability of information about volunteering" as a reason for not being able to serve as a volunteer at such sporting events despite wanting to do so. This suggests a need to provide pertinent information about how students can help at disability sports events.

はじめに

授業を設計し、教授・指導していく上で、また、カリキュラムを編成する上で、受講者のレディネス、すなわち受講者の知識や技能、経験、関心、意欲などの心身の準備状態を把握する必要がある。文教大学湘南校舎体育委員会では、2017年度から体育科目の受講者に対してレディネス

トをeラーニングシステム経由で行っているが、その準備として、学生のスポーツ経験や意識を把握するためにアンケート調査を行った。この調査結果から学生の特徴を明らかにしたい。なお、この調査は、全国大学体育連合が複数の大学で同時に行っているため、その全国的な結果と比較する。

I. 目的

文教大学湘南校舎の体育のカリキュラムを編成したり、個々の授業計画を立てたり、学生を指導したりする上の参考資料とするために、学生のスポーツ経験と意識などについてアンケート調査から把握すること、そして、それを全国的な傾向と比較することが本研究の目的である。

II. 方法

全国大学体育連合が会員校の協力を得て行ったアンケート調査の概要は以下の通りである。

調査名：大学生のスポーツ経験と意識調査
調査期間：2016年9月1日から11月16日
調査対象：全国大学体育連合の会員大学14校および短期大学2校
回答者：学生5,861人（男性：3,326人、女性：2,535人）
1年生4,173人、2年生953人、3年生428人、4年生307人

文教大学湘南校舎もこの調査に参加した。調査は無記名で行い、スマートフォンを利用してウェブで回答させた。回答者には、匿名性を担保し、調査協力や回答内容は成績に関係しないこと、回答データを適切に管理すること、集計結果は学術的成果として公開することなどについて、口頭と文書で説明し、同意を得たものだけ集計した。文教大学湘南校舎の結果を全国の結果と比較も行い、学生の特徴を明らかにする。なお、全国の結果には文教大学生の回答も含まれている。

III. 結果

文教大学湘南校舎では、「スポーツ健康・演習」(7クラス)のほか、「スポーツB」(1クラス)、講義科目の「スポーツ科学」(1クラス)、初年次演習科目の「基礎ゼミナール」(1クラス)の受講生、合計189人が調査に回答した。回答者の所属学部別では、情報学部68人、国際学部82人、健康栄養学部18人、経営学部21人であった。性別・学年別内訳は表1の通りであり、全体の73%が1年生であった。全国調査は71.2%であるので、ほぼ同じ比率である。また、男性の比率は、本調査が57.7%で、全国が56.7%であった。したがって、全国結果と比較する上で特段問題はないと考えられる。

表1 性別・学年別回答者数

	1年	2年	3年	4年以上	計
男性	83	19	4	3	109
女性	55	22	3	0	80
計	138	41	7	3	189

(1) 最近1ヶ月間の運動・スポーツへの取り組み

最近1ヶ月間に1回あたり30分以上の運動・スポーツをしているかどうか、そして、今後の実施意欲について、以下の5件で尋ねた。なお、運動・スポーツには自転車通学や体育の授業を含むとした。

- ・最近1ヶ月間、運動・スポーツをしていない。また、これから先もするつもりはない。
- ・最近1ヶ月間、運動・スポーツをしていない。しかし、近い将来(6ヶ月以内)に始めようと思っている。
- ・最近1ヶ月間、運動・スポーツをしている。しかし、週2回未満である。
- ・最近1ヶ月間、週2回以上、運動・スポーツをしている。しかし、始めてから6ヶ月以内である。
- ・最近1ヶ月間、週2回以上、運動・スポーツをしている。また、6ヶ月以上継続している。

回答結果を表2に示した。運動習慣者は男性が62.4%で、女性が43.8%であった。男女の比較では、統計的な有意差が認められた($\chi^2(2)=6.46, p<.01$)。全国の結果は男性が77.4%、女性が55.9%なので、これらと比較すると文教大生は運動習慣のある学生の比率が低い。

表2 最近1ヶ月間の運動・スポーツの取り組み

	文教大学			全国		
	男 n=109	女 n=80	男女計 n=189	男 n=3,326	女 n=2,535	男女計 n=5,861
週2回以上運動をして6ヶ月以上継続	19.3%	8.8%	14.8%	42.1%	21.3%	33.0%
週2回以上運動をしているが6ヶ月未満	13.8%	7.5%	11.1%	7.6%	8.6%	8.0%
最近1ヶ月運動しているが週2回未満	29.3%	27.5%	28.6%	27.7%	26.0%	27.0%
近い将来(6ヶ月以内)に始めようと思う	22.0%	29.9%	25.4%	12.5%	20.5%	16.0%
最近1ヶ月間運動スポーツをしていない	15.6%	26.3%	20.1%	10.1%	23.6%	16.0%
計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%

(2) 運動・スポーツを継続的に進んでいた学校段階

スポーツ少年団や中高の部活動、民間のスクール、地域スポーツなどで、運動やスポーツを継続的に進んでいた学校段階では、男女ともに中学校時代が最も高く、男性では88.1%、女性では71.3%であった(表3)。中学校から、高校、大学へと学校段階が上がるにしたがって、男女ともに運動を継続していた比率が低下している。女性の8.8%は、継続的に運動を行ったことがいずれの学校段階においてもなかった。なお、これらの結果は全国的な結果とほぼ同じであった。

表3 運動を継続的にしていた学校段階

	文教大学			全国		
	男 n=109	女 n=80	男女計 n=189	男 n=3,326	女 n=2,535	男女計 n=5,861
小学校	72.5%	63.8%	68.8%	80.8%	62.0%	72.6%
中学校	88.1%	71.3%	81.0%	88.2%	67.2%	79.1%
高校	71.6%	56.3%	65.1%	76.2%	49.5%	64.6%
大学	33.0%	25.0%	29.6%	46.3%	27.3%	38.1%
ない	2.8%	8.8%	5.3%	2.8%	13.6%	7.5%

(3) 運動・スポーツをするきっかけになった人

運動やスポーツをするきっかけとなった人では、男性では「友人」が最も多く73.6%で、次に「家族・親戚」が44.3%、「マンガやドラマなどの登場人物」(12.3%)であった(表4)。女性では、「家族・親戚」が最も多く65.3%、次に「友人」が56.0%、「その他」(9.3%)であった。「友人」や「家族・親戚」が多いのは全国の結果でも同様であった。

表4 スポーツを始めたきっかけとなった人

	文教大学			全国		
	男 n=101	女 n=75	男女計 n=186	男 n=3,262	女 n=2,243	男女計 n=5,505
友人	73.6%	56.0%	66.3%	65.8%	64.1%	61.1%
家族・親戚	44.3%	65.3%	53.0%	57.1%	57.5%	53.8%
学校の教師	5.7%	6.7%	6.1%	9.7%	9.4%	9.0%
実在の有名選手	11.3%	4.0%	8.3%	11.9%	3.2%	7.8%
マンガなどの登場人物	12.3%	2.7%	8.3%	7.4%	3.5%	5.5%
その他	7.5%	9.3%	8.3%	10.3%	9.2%	9.2%

(4) 部活ノートや練習ノートの利用

運動やスポーツをする上で、部活ノートや練習ノートをつけていたと回答した男性は44.3%で、女性では59.7%であった(表5)。おおよそ2人に1人の割合で部活ノートや練習ノートをつけていた。この結果は全国の結果と同様であった。なお、集計には無回答の2人と「スポーツをしていないので該当しない」を選択した9人は除いた。

表5 練習ノートをつけていた学生

	文教大学			全国		
	男 n=106	女 n=72	男女計 n=178	男 n=3,250	女 n=2,189	男女計 n=5,439
つけた	44.3%	59.7%	50.6%	46.6%	54.3%	49.7%
つけていない	55.7%	40.3%	49.4%	53.4%	45.7%	50.3%

(5) 運動部やスポーツクラブ、スクールなどで身につけたり経験したりしたこと

スポーツ活動を通じて身につけたり、経験したりしたことについて、スポーツ活動の経験がある男性で最も回答が多かったのは「チームワーク力」(80.2%)で、次いで、「コミュニケーション力」(71.7%)、「自己管理能力」(57.5%)であった(表6)。女性も同様で、最も回答が多かったのは「チームワーク力」(80.6%)で、次いで、「コミュニケーション力」(73.6%)、「自己管理能力」(62.5%)であった。これらは全国の結果でも同様であった。

これらはいずれも社会人基礎力の構成要素である(表7)。スポーツ活動が社会人基礎力を向上させる経験となっていると言える。

表6 運動部やスポーツクラブ、スクールなどで身につけたり経験したりしたこと

	文教大学			全国		
	男 n=106	女 n=72	男女計 n=178	男 n=3,269	女 n=2,227	男女計 n=5,496
チームワーク力	80.2%	80.6%	80.3%	79.8%	81.1%	80.3%
コミュニケーション力	71.7%	73.6%	72.5%	76.3%	71.6%	74.4%
自己管理能力	57.5%	62.5%	59.6%	62.6%	51.5%	58.1%
組織を運営する力	32.1%	25.0%	29.2%	36.0%	28.6%	33.0%
運動での怪我や病気	64.2%	69.4%	66.3%	62.6%	50.0%	57.5%
暴言・罵声	16.0%	12.5%	14.6%	19.7%	10.8%	16.1%
いじめ	8.5%	11.1%	9.6%	9.9%	7.4%	8.9%
体罰・暴力	8.5%	5.6%	7.3%	11.7%	5.6%	9.2%
ハラスメント	5.7%	1.4%	3.9%	3.9%	2.0%	3.2%

表7 社会人基礎力の構成要素

分類	能力要素	内容
I 前に踏み出す力 (アクション)	①主体性	物事に進んで取り組む力
	②働きかけ力	他人に働きかけ巻き込む力
	③実行力	目的を設定し確実に行動する力
II 考え抜く力 (シンキング)	④課題発見力	現状を分析し目的や課題を明らかにする力
	⑤計画力	課題の解決に向けたプロセスを明らかにし、準備する力
	⑥創造力	新しい価値を生み出す力
III チームで働く力 (チームワーク)	⑦発信力	自分の意見をわかりやすく伝える力
	⑧傾聴力	相手の意見を丁寧に聴く力
	⑨柔軟性	意見の違いや立場の違いを理解する力
	⑩状況把握力	自分と周囲の人々や物事との関係性を理解する力
	⑪規律性	社会のルールや人との約束を守る力
	⑫ストレスコントロール力	ストレスの発生源に対応する力

一方、「暴言・罵声」が男性 16.0%・女性 12.5%、「体罰・暴力」が男性 8.5%・女性 5.6%、「いじめ」が男性 8.5%・女性 11.1%、「ハラスメント」が男性 5.7%・女性 1.4%であった(表 6)。これらの結果も全国の結果と同様であった。

(6) スポーツやダンスなどに関する情報を得るために利用するメディア

最も利用するメディアは、男女ともに TV とインターネット(SNS)であった。TV は男性が 78.9%、女性が 93.8%であった。インターネット(SNS)は男性が 77.1%、女性が 76.3%であった。続いて多いのは雑誌と新聞であるが、これらについては、男性の方が女性よりも利用する比率が高かった。雑誌は男性が 31.2%、女性が 17.5%であった。新聞は男性が 20.2%、女性が 11.3%であった。これらの結果は全国の結果と同様であった。

表 8 スポーツやダンスなどに関する情報を得るために利用するメディア

	文教大学			全国		
	男 n=109	女 n=80	男女計 n=189	男 n=3,326	女 n=2,535	男女計 n=5,861
TV	78.9%	93.8%	85.2%	82.6%	82.4%	82.5%
インターネット(SNS)	77.1%	76.3%	76.7%	78.5%	74.4%	76.7%
雑誌	31.2%	17.5%	25.4%	30.9%	14.8%	23.9%
新聞	20.2%	11.3%	16.4%	19.5%	13.6%	16.9%
その他	1.8%	1.3%	1.6%	4.5%	3.2%	4.0%

(7) 競技場などで直接観戦・鑑賞したいスポーツ種目

競技場などで直接観戦・鑑賞したいスポーツ種目について、男性では、野球(56.0%)とサッカー(52.3%)が多く 50%を超えており、次いで、バスケットボール(39.4%)、バレーボール(20.2%)、ダンス(18.3%)であった(表 9)。障害者スポーツは 3.7%であった。

女性では、バレーボール(45.0%)とバスケットボール(42.5%)が多く、次いで、野球(41.3%)、サッカー(36.3%)、フィギュアスケート(33.8%)、ダンス(31.3%)であった。障害者スポーツは 2.5%であった。

男女の比較で特徴的であったのは、女性ではバレーボールが人気であることに加え、フィギュアスケートやダンスなど審美系競技に関心が高く、男性ではサッカー、野球に関心が集中していることが示された。「なし」は少なく、男性で 4.6%、女性で 3.8%であった。全国の結果と比べてみると、男性のダンスが比較的多い。

表9 競技場などで直接観戦・鑑賞したいスポーツの種目

	文教大学				全国			
	男 n=109	女 n=80	男 n=3,326	女 n=2,535	男 n=3,326	女 n=2,535	男 n=3,326	女 n=2,535
1 野球	56.0%	バレーボール 45.0%	サッカー	51.5%	バレーボール	43.3%		
2 サッカー	52.3%	バスケットボール 42.5%	野球	48.6%	野球	43.0%		
3 バスケットボール	39.4%	野球 41.3%	バスケットボール	28.9%	サッカー	38.0%		
4 バレーボール	20.2%	サッカー 36.3%	バレーボール	22.0%	フィギュアスケート	33.6%		
5 ダンス	18.3%	フィギュアスケート 33.8%	ラグビー	17.2%	バスケットボール	31.2%		
6 マラソン・駅伝	16.5%	ダンス 31.3%	陸上競技	17.0%	ダンス	30.2%		
7 ラグビー	14.7%	水泳 22.5%	マラソン・駅伝	13.7%	水泳	16.8%		
8 水泳	14.7%	陸上競技 12.5%	水泳	11.2%	陸上競技	15.3%		
9 陸上競技	13.8%	マラソン・駅伝 10.0%	大相撲	10.5%	マラソン・駅伝	13.4%		
10 大相撲	12.8%	大相撲 7.5%	ダンス	10.1%	ラグビー	10.8%		
11 剣道	11.9%	ラグビー 5.0%	柔道	7.8%	障がい者スポーツ	9.8%		
12 柔道	5.5%	柔道 3.8%	フィギュアスケート	6.8%	剣道	5.5%		
13 フィギュアスケート	5.5%	障がい者スポーツ 2.5%	剣道	6.4%	大相撲	4.9%		
14 ゴルフ	3.7%	剣道 1.3%	障がい者スポーツ	4.4%	柔道	4.5%		
15 障がい者スポーツ	3.7%	ゴルフ 1.3%	ゴルフ	3.5%	ゴルフ	1.5%		
その他	5.5%	その他 12.5%	その他	11.0%	その他	8.6%		
なし	4.6%	なし 3.8%	なし	8.2%	なし	7.2%		

(8) 過去1年において競技場などで直接、観戦・鑑賞したスポーツ種目

過去1年において競技場などで直接、スポーツやダンスなどを観戦・鑑賞した比率は、男性が80.7%、女性が63.7%であった。その種目は、男性では多い順に、野球(33.9%)、サッカー(23.9%)、バスケットボール(13.8%)、マラソン・駅伝(12.8%)、陸上競技(11.9%)であった(表10)。障害者スポーツは3.7%であった。「観戦しなかった」は19.3%であった。

女性では多い順に、野球(20.0%)、サッカー(17.5%)、ダンス(15.0%)、バレーボール(13.8%)、陸上競技(8.8%)、バスケットボール(8.8%)であった。障害者スポーツは0.0%であった。なお、「観戦しなかった」の回答が36.3%で全国(26.7%)より多い。

前問の「観戦したい」回答と「直接、観戦した」回答の差が最も大きかった種目は、男性ではサッカー(28.4%ポイント)で、次いで、バスケットボール(25.6%ポイント)、野球(22.1%ポイント)であった。女性ではバスケットボール(33.7%ポイント)で、フィギュアスケート(31.3%ポイント)、バレーボール(31.2%ポイント)であった。男性ではサッカー、女性ではフィギュアスケートの潜在的需要が大きいのと言えよう。

表 10 過去 1 年において競技場などで直接、観戦・鑑賞したスポーツ種目

	文教大学				全国			
	男 n=109		女 n=80		男 n=3,326		女 n=2,535	
1 野球	33.9%	野球	20.0%	野球	37.6%	野球	34.8%	
2 サッカー	23.9%	サッカー	17.5%	サッカー	28.4%	サッカー	16.0%	
3 バasketボール	13.8%	ダンス	15.0%	バasketボール	10.1%	バasketボール	11.3%	
4 マラソン・駅伝	12.8%	バレーボール	13.8%	陸上競技	9.8%	ダンス	10.3%	
5 陸上競技	11.9%	陸上競技	8.8%	マラソン・駅伝	7.1%	バレーボール	9.7%	
6 バレーボール	8.3%	バasketボール	8.8%	バレーボール	6.3%	陸上競技	8.0%	
7 水泳	7.3%	マラソン・駅伝	6.3%	ラグビー	5.9%	マラソン・駅伝	7.2%	
8 剣道	7.3%	水泳	5.0%	水泳	4.2%	水泳	4.8%	
9 ダンス	7.3%	フィギュアスケート	2.5%	ダンス	3.5%	フィギュアスケート	2.7%	
10 ラグビー	6.4%	剣道	1.3%	柔道	2.9%	剣道	2.4%	
11 大相撲	4.6%	ラグビー	0.0%	剣道	2.3%	ラグビー	2.2%	
12 柔道	4.6%	柔道	0.0%	大相撲	2.1%	柔道	1.3%	
13 障がい者スポーツ	3.7%	大相撲	0.0%	ゴルフ	1.4%	大相撲	1.0%	
14 ゴルフ	2.8%	障がい者スポーツ	0.0%	障がい者スポーツ	1.2%	障がい者スポーツ	1.0%	
15 フィギュアスケート	2.8%	ゴルフ	0.0%	フィギュアスケート	1.1%	ゴルフ	0.8%	
その他	3.7%	その他	11.3%	その他	7.2%	その他	7.2%	
なし	19.3%	なし	36.3%	なし	18.3%	なし	26.7%	

(9) オリンピック・パラリンピック東京大会(2020年)の観戦希望

オリンピック東京大会を直接、競技場で観戦したいかどうかについて、「そう思う」との回答は、男性では 45.9%、女性では 43.8%で、男女差はみられなかった(表 11)。全国の結果(男性 52.6%、女性 47.6%)と比べるとやや低い。しかし、「そう思う」と「ややそう思う」の合計は男女とも全国の結果と同様である。

パラリンピック東京大会を直接、競技場で観戦したいかどうかについて、「そう思う」との回答は、男性では 23.9%、女性では 18.8%であった(表 12)。また、全国の結果(男性 29.0%、女性 25.4%)と比べるとやや低い。しかし、「そう思う」と「ややそう思う」の合計は男女とも同程度である。

表 11 オリンピック東京大会(2020年)の観戦希望

	文教大学			全国		
	男 n=109	女 n=80	男女計 n=189	男 n=3,326	女 n=2,533	男女計 n=5,859
そう思う	45.9%	43.8%	45.0%	52.6%	47.6%	50.4%
ややそう思う	26.6%	37.5%	31.2%	21.4%	25.3%	23.1%
あまりそう思わない	14.7%	7.5%	11.6%	12.0%	12.0%	12.0%
そう思わない	10.1%	8.8%	9.5%	10.7%	11.9%	11.2%
わからない	2.8%	2.5%	2.6%	3.3%	3.2%	3.3%

表12 パラリンピック東京大会(2020年)の観戦希望

	文教大学			全国		
	男	女	男女計	男	女	男女計
	n=109	n=80	n=189	n=3,323	n=2,532	n=5,855
そう思う	23.9%	18.8%	21.7%	29.0%	25.4%	27.4%
ややそう思う	32.1%	31.3%	31.7%	23.3%	28.4%	25.5%
あまりそう思わない	24.8%	21.3%	23.3%	22.7%	22.6%	22.6%
そう思わない	14.7%	18.8%	16.4%	18.0%	16.5%	17.4%
わからない	4.6%	10.0%	6.9%	7.0%	7.1%	7.1%

(10) スポーツやダンスなどの試合・公演を競技場などで直接観戦・鑑賞することを妨げる理由

スポーツやダンスなどの試合・公演を競技場などで直接観戦・鑑賞することを妨げる理由について、男女全体では「料金がかかる」が最も多く68.8%、次いで「会場が遠い」(54.0%)、「時間がない」(45.0%)、「試合などの情報が入りにくい」(19.0%)、「一緒に行く人がいない」(15.3%)、「ルールを知らない」(13.8%)であった(表13)。「試合などの情報が入りにくい」と「ルールを知らない」は、男女間で差がみられ、いずれも女性の回答率が高い。これらの比率や傾向は全国の結果と同様であった。

表13 スポーツやダンスなどの試合・公演を競技場などで直接観戦・鑑賞することを妨げる理由

	文教大学			全国		
	男	女	男女計	男	女	男女計
	n=109	n=80	n=189	n=3,326	n=2,535	n=5,861
料金がかかる	68.8%	68.8%	68.8%	66.3%	69.3%	67.6%
会場が遠い	55.0%	52.5%	54.0%	59.0%	62.2%	60.4%
時間がない	45.0%	45.0%	45.0%	52.6%	43.8%	48.8%
試合の情報が手に入りにくい	12.8%	27.5%	19.0%	12.5%	15.3%	13.7%
一緒に行く人がいない	15.6%	15.0%	15.3%	14.6%	11.8%	13.4%
ルールを知らない	7.3%	22.5%	13.8%	7.0%	17.5%	11.5%
その他	2.8%	2.5%	2.6%	7.5%	5.5%	6.7%

(11) 過去1年に経験したスポーツ・ボランティアの状況

過去1年間にスポーツ・ボランティアの経験をしていた男性は39.4%、女性は31.2%であった(表14)。経験した種類のうち最も多いのは「スポーツの審判」(14.8%)で、次いで「スポーツの指導」(12.7%)、「大会・イベントの運営や世話」(14.3%)、「団体・クラブの運営や世話」(10.1%)であった。男性と女性を比較すると、「指導」や「審判」は男性の方が高く、「運営や世話」は女性の方が高かった。全国の結果と比べると男性の場合は、「スポーツの審判」と「スポーツの指導」が全国よりも低く、女性の場合は「団体・クラブの運営や世話」が高かった。

表 14 過去 1 年に経験したスポーツ・ボランティアの状況

	文教大学			全国		
	男	女	男女計	男	女	男女計
	n=109	n=80	n=189	n=3,326	n=2,535	n=5,861
スポーツの指導	16.5%	7.5%	12.7%	19.9%	10.0%	15.6%
スポーツの審判	19.3%	8.8%	14.8%	23.7%	12.6%	18.9%
団体・クラブの運営や世話	9.2%	11.3%	10.1%	9.1%	7.1%	8.3%
大会・イベントの運営や世話	13.8%	15.0%	14.3%	15.2%	14.2%	14.7%
経験したことがない	60.6%	68.8%	64.0%	51.0%	67.1%	57.9%

(12) やってみたいスポーツ・ボランティア

なんらかのスポーツ・ボランティアをしたいと回答した男性は 51.4% で、女性は 58.7% であった (表 15)。「スポーツの指導」や「スポーツの審判」を希望するものは、男性が女性より多く、男性ではそれぞれ 27.5%、14.7% に対し、女性では 18.8%、13.8% であった。これは、スポーツの実施率がそもそも男性の方が高いためだと思われる。

一方、「団体・クラブの運営や世話」、「大会やイベントの運営や世話」では、女性の方が男性よりも希望するものが多く、女性ではそれぞれ、18.8%、40.0% に対し、男性ではそれぞれ 14.7%、14.7% であった。

これらの比率や傾向は全国の結果と同様であった。

表 15 やってみたいスポーツ・ボランティア

	文教大学			全国		
	男	女	男女計	男	女	男女計
	n=109	n=80	n=189	n=3,326	n=2,535	n=5,861
スポーツの指導	27.5%	18.8%	23.8%	33.2%	15.1%	25.4%
スポーツの審判	14.7%	13.8%	14.3%	17.2%	12.4%	15.1%
団体・クラブの運営や世話	14.7%	18.8%	16.4%	14.5%	21.3%	17.5%
大会・イベントの運営や世話	14.7%	40.0%	25.4%	19.5%	39.3%	28.0%
どれもしたいと思わない	48.6%	41.3%	45.5%	42.8%	42.8%	42.8%

(13) スポーツ・ボランティアをしたいと思っているのにできない理由

スポーツ・ボランティアをしたいと思っているのにできない理由としては、男女全体では、「時間が無い」と回答したものの割合が最も高く 33.3% であった (表 16)。次いで「ボランティアなどの情報が手に入りにくい」が 28.6%、「経費がかかる」が 13.8%、「会場が遠い」が 13.8% であった。どの理由も女性の方が高く、特に「ボランティアなどの情報が手に入りにくい」が 43.8% と高かった。これは、全国の結果 (27.0%) と比べても高い。

表 16 スポーツ・ボランティアをしたいと思っているのにできない理由

	文教大学			全国		
	男 n=109	女 n=80	男女計 n=189	男 n=3,326	女 n=2,535	男女計 n=5,861
時間がない	33.0%	33.8%	33.3%	38.1%	36.8%	37.6%
経費がかかる	10.1%	18.8%	13.8%	15.0%	14.2%	14.6%
会場が遠い	10.1%	18.8%	13.8%	14.1%	15.8%	14.8%
ボランティアなどの情報が手に入りにくい	17.4%	43.8%	28.6%	16.2%	27.0%	20.9%
一緒に行く人がいない	9.2%	15.0%	11.6%	8.0%	10.7%	9.2%
その他	2.8%	2.5%	2.6%	5.2%	3.6%	4.5%
したいと思わない	39.4%	26.3%	33.9%	35.3%	33.5%	34.5%

(14) オリンピック・パラリンピック東京大会(2020年)での運営や世話のボランティア

オリンピック東京大会で運営や世話のボランティアをしたいかについて、男女全体では「そう思う」が29.6%、「ややそう思う」が21.7%であった(表17)。合わせて51.3%が大会運営や世話のボランティアをしたいと思っていた。女性では、「そう思う」が36.3%と男性(24.8%)よりも高く、全国の結果(26.9%)よりも高かった。

パラリンピック東京大会については、男女全体では「そう思う」(25.4%)、「ややそう思う」(19.0%)を合わせた44.4%が大会運営や世話のボランティアをしたいと思っていた(表18)。男性では、「そう思う」(25.7%)、「ややそう思う」(14.7%)であったのに対し、女性では、「そう思う」(25.0%)、「ややそう思う」(25.0%)であり、女性の方がパラリンピック東京大会のボランティアを希望する割合が高かった。これらの比率や傾向は全国の結果と同様であった。

表 17 オリンピック東京大会(2020年)での運営や世話のボランティア希望

	文教大学			全国		
	男 n=109	女 n=80	男女計 n=189	男 n=3,317	女 n=2,528	男女計 n=5,845
そう思う	24.8%	36.3%	29.6%	24.2%	26.9%	25.4%
ややそう思う	20.2%	23.8%	21.7%	20.7%	26.7%	23.3%
あまりそう思わない	22.0%	18.8%	20.6%	22.8%	19.1%	21.2%
そう思わない	29.4%	15.0%	23.3%	24.7%	19.5%	22.4%
わからない	3.7%	6.3%	4.8%	7.5%	7.7%	7.6%

表 18 パラリンピック東京大会(2020年)での運営や世話のボランティア希望

	文教大学			全国		
	男 n=109	女 n=80	男女計 n=189	男 n=3,317	女 n=2,529	男女計 n=5,846
そう思う	25.7%	25.0%	25.4%	20.2%	21.4%	20.7%
ややそう思う	14.7%	25.0%	19.0%	18.8%	27.1%	22.4%
あまりそう思わない	22.9%	26.3%	24.3%	24.2%	22.0%	23.3%
そう思わない	32.1%	18.8%	26.5%	27.4%	21.1%	24.7%
わからない	4.6%	5.0%	4.8%	9.1%	8.3%	9.0%

(15) スポーツ推薦や強化指定運動部などで自分の大学が競技スポーツに力を入れること

スポーツ推薦や強化指定運動部などで自分の大学が競技スポーツに力を入れることについて、男女全体では「賛同できる」(58.7%)、「おおむね賛同できる」(34.4%)であった(表 19)。両者を合わせた 93.1%が、大学が競技スポーツに力を入れることについて賛同していた。これらの比率や傾向は全国の結果と同様であった。

表 19 スポーツ推薦や強化指定運動部などで自分の大学が競技スポーツに力を入れること

	文教大学			全国		
	男	女	男女計	男	女	男女計
	n=109	n=80	n=189	n=3,317	n=2,526	n=5,828
賛同できる	57.8%	60.0%	58.7%	59.9%	61.3%	60.5%
おおむね賛同できる	33.9%	35.0%	34.4%	32.3%	33.3%	32.7%
あまり賛同できない	6.4%	2.5%	4.8%	5.1%	3.7%	4.5%
全く賛同できない	1.8%	2.5%	2.1%	2.4%	1.4%	1.9%

(16) 運動部学生が学業と両立できるように学修支援やキャリア支援を大学が行うこと

運動部学生が学業と両立できるように学修支援やキャリア支援を大学が行うこと、男女全体では「賛同できる」(60.5%)、「おおむね賛同できる」(32.7%)であった(表 20)。両者を合わせた 93.2%が、大学が運動部学生に学修支援やキャリア支援することについて賛同していた。これらの比率や傾向は全国の結果と同様であった。

表 20 運動部学生が学業と両立できるように学修支援やキャリア支援を大学が行うこと

	文教大学			全国		
	男	女	男女計	男	女	男女計
	n=109	n=80	n=189	n=3,317	n=2,526	n=5,843
賛同できる	57.8%	60.0%	58.7%	59.9%	61.3%	60.5%
おおむね賛同できる	33.9%	35.0%	34.4%	32.3%	33.3%	32.7%
あまり賛同できない	6.4%	2.5%	4.8%	5.1%	3.7%	4.5%
全く賛同できない	1.8%	2.5%	2.1%	2.4%	1.4%	1.9%

IV. まとめ

189人の学生から得られた回答から、体育のカリキュラム編成や学生指導について、以下の示唆が得られた。

1. 運動習慣の形成支援の必要性が高い。

運動習慣者は男性が 62.4%で、女性が 43.8%であった。全国の結果は男性が 77.4%、女性が 55.9%なので、これらと比較すると文教大生は運動習慣のある学生の比率が低いことから、運動習慣を形成するよう指導したり、支援したりする必要性が高い。

2. スポーツ観戦のニーズが高いのは4種目で、試合などの情報提供の必要性がある。

豊かなスポーツライフを形成させるためには、スポーツを観戦して楽しむ態度形成も重要であ

る。過去1年において競技場などで直接、スポーツやダンスなどを観戦・鑑賞した比率は、男性が80.7%、女性が63.7%であった。そして、直接観戦・鑑賞したいスポーツ種目について、男性では、野球(56.0%)とサッカー(52.3%)、バスケットボール(39.4%)が多く、女性では、バレーボール(45.0%)とバスケットボール(42.5%)、野球(41.3%)が多かった。「観戦したい」回答と「直接、観戦した」回答の差が最も大きかった種目は、男性ではサッカー(28.4%ポイント)で、次いで、バスケットボール(25.6%ポイント)、野球(22.1%ポイント)であった。女性ではバスケットボール(33.7%ポイント)で、フィギュアスケート(31.3%ポイント)、バレーボール(31.2%ポイント)であった。これらのスポーツ種目は潜在的需要が大きいと言えるので、観戦を勧めるとその効果も期待できよう。

直接観戦・鑑賞することを妨げる理由としては、「料金がかかる」(68.8%)や「会場が遠い」(54.0%)、「時間がない」(45.0%)などの回答が多かったが、Jリーグの試合を無料で観戦できるサービス((株)リクルートライフスタイルのJマジ!)もあるので、授業で紹介する意義もあると思われる。また、大学スポーツの観戦は妨げる要因が比較的少ないので、試合などの情報を提供することによって観戦者を増やすことが期待できる。

多くの観戦者が期待できるという点からは、大学スポーツで強化指定する種目には、野球とサッカー、バスケットボール、バレーボールが望ましいと考えられる。

3. 障害者スポーツに関する教育の必要性がある。

過去1年において競技場などで直接、観戦・鑑賞したスポーツ種目として、障害者スポーツの回答率は男性が3.7%、女性が0.0%であった。これは、全国の男性(1.2%)、女性(1.0%)と同程度であるが、競技場などで直接観戦・鑑賞したいスポーツ種目としては、男性が3.7%、女性が2.5%であった。これは、全国の男性(4.4%)、女性(9.8%)より低い。共生社会実現のためにも障害者スポーツに関する教育と観戦や体験を勧める必要がある。

4. スポーツ・ボランティアの情報提供の必要性がある。

過去1年間にスポーツ・ボランティアの経験をしていた男性は39.4%、女性は31.2%であった。そして、なんらかのスポーツ・ボランティアをしたいと回答した男性は51.4%で、女性は58.7%であり、希望する学生が少なくない。したいと思っているのにできない理由としては、男女全体で「ボランティアなどの情報が手に入りにくい」の回答が28.6%であった。特に女性が43.8%と高かった。これは、全国の結果(27.0%)と比べても高い。情報提供する必要がある。

謝辞 本調査は、全国大学体育連合の共同研究「大学生のスポーツ経験と意識」に参加して行い、同連合から本学の回答データの提供を受けた。記して感謝する。

文献

全国大学体育連合『大学生のスポーツ経験と意識調査報告書』、2017年

